

坂道 sakamichi slope

後に霧夜の月を背負ひ。

Ato ni kiriya no tsuki o seoi.

私の足は、冷えきった大地の沈黙を破りながら、坂道を上る。

Watashi no ashi wa, hiekitta daichi no chinmoku o yaburi-nagara, sakamichi o noboru.

地上に映る大きい自分の影を眺めて微笑み、云ふ、

Chijō ni utsuru ōkī jibun no kage o nagamete hohoemi, iu,

『これはゴシック式の体だ、二つの耳は、巴里の夜陰を覗くノートル・ダームのガーゴイルだ。』

“kore wa goshikku-shiki no karada da, futatsu no mimi wa, Pari no yain o nozoku Nootoru Daamu no gaagoiru da.”

私はある晩餐会を終へて、今家路を急ぐものであるが、

Watashi wa aru bansan-kai o oete, ima ieji o isogu mono de aru ga,

面前の星を目掛けて進む中世紀の騎士のやうな気がする、

menzen no hoshi o megakete susumu naka seiki no kishi no you na ki ga suru,

私の体に、一段勇気がりんりんと鳴る。

watashi no karada ni, ichidan yūki ga rinrin to naru.

向ふから坂を下り私を通過ぎるものがある、

Mukau kara saka o ori watashi o toorisugiru mono ga aru,

私は冷笑の一瞥を彼に与へる、そしていふ、

watashi wa reishō no ichibetsu o kare ni ataeru, soshite iu,

『はは、君は撃退されて逃げる敗残者だな、憐れな弱虫め!』

“Ha ha, kimi wa gekitai sarete nigeru haizan-sha da na, aware na yowamushi-me!”

私は坂の上から、右へ廻り、自分の家を知らぬ顔して行過ぎる、

Watashi wa sakanoue kara, migi e mawari, jibun no ie o shiranu kao shite ikisugiru,

また戻って、その前をすつと通過ぎ、心のなかで思ふ、

mata modotte, sono zen o sutto toorisugi, kokoro no naka de omou,

『僕の家は此処でない、外に何処かもっと立派な家がある やうな気がする。』

“boku no ie wa koko de nai, soto ni dokoka motto rippa na ie ga aru you na ki ga suru.”

そして私は背伸びして、頭を上げ天上の星を眺める。

Soshite watashi wa senobi shite, atama o age tenjō no hoshi o nagameru.

日本詩人	Nihon shijin	1925.0401	
表象抒情詩	hyōshō jojō shi	1925.1203	130
詩歌殿 Shika den		1943.0430	258
表象抒情詩集	hyōshō jojō shishū	1947.0522	122
詩人ヨネ・ノグチの詩	shijin Yone Noguchi no shi	1966.1285	266
日本の詩歌	Nihon no shika	1969.0100	232
現代日本文学大系	Gendai nihon bungaku taikai	1972.0100	229

背負う【しょう】【せおう】 (v5u,vt) to be burdened with; to carry on back or shoulder;

## 坂道

後に霧夜の月を背負ひ。

私の足は、冷えきつた大地の沈黙を破りながら、坂道を上る。

地上に映る大きい自分の影を眺めて微笑み、云ふ、

『これはゴシック式の体だ、二つの耳は、巴里の夜陰を覗くノートル・ダームのガールだ。』

私はある晩餐会を終へて、今家路を急ぐものであるが、

面前の星を目掛けて進む中世紀の騎士のやうな気がする、

私の体に、一段勇気がりんりんと鳴る。

向ふから坂を下り私を通過ぎるものがある、私は冷笑の一瞥を彼に与へる、そしていふ、

『はは、君は撃退されて逃げる敗残者だな、憐れな弱虫め！』

私は坂の上から、右へ廻り、自分の家を知らぬ顔して行過ぎる、

また戻つて、その前をすつと通過ぎ、心のなかで思ふ、

『僕の家は此処でない、外に何処かもっと立派な家があるやうな気がする。』

そして私は背伸びして、頭を上げ天上の星を眺める。